

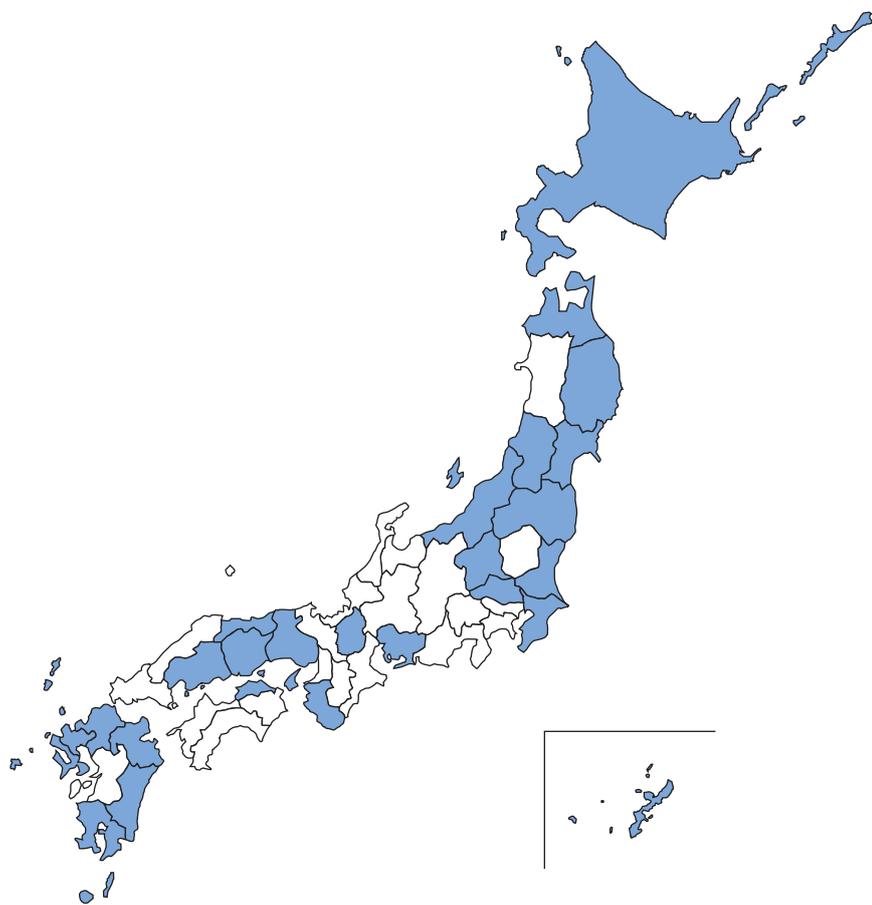
昨シーズンの鳥インフルエンザの発生状況

貫井 涼平
(営業部 学術・安全管理室)

猛暑日だけではなく酷暑日も多く、たくさんの汗をかいた夏が過ぎ、日暮れも早く年の瀬が近づいてきたと感じる日々になりました。2023年は1年を通じて鳥インフルエンザの話題が各所で多く取り上げられ、皆さんも様々な場で鳥インフルエンザの情報を耳にしたと思います。また各メディアで卵の品薄や高騰が報じられ、世間一般の鳥インフルエンザ関心度はかなり高くなったようにも思います。2023年を締めくくる本号では既に防疫体制を取っている状況かとは思いますが、昨シーズン(2022-2023)の鳥インフルエンザの発生状況と疫学調査チームの報告について農林水産省HP内、「鳥インフルエンザに関する情報」の内容を整理し、改めて皆さんと確認したいと思います。(9月27日執筆)

始めに家畜伝染病予防法(家伝法)では病原性の程度や変異の可能性によって、高病原性鳥インフルエンザ(HPAI)、低病原性鳥インフルエンザ(LPAI)、鳥インフルエンザの3つに分類されており、HPAIとLPAIは法定伝染病に、鳥インフルエンザは届出伝染病に指定されています。またHPAIの場合は、鶏だけではなくあひる、うすら、きじ、だちょう、ほろほろ鳥、七面鳥も家伝法の対象となる動物となっています。昨シーズンに初めて野鳥で確認された鳥インフルエンザは、9月25日に神奈川県海老名市のハヤブサでした。関東の神奈川県で1番に確認されたことで業界関係者は大変驚いたかと思います。ハヤブサは冬鳥ではなく留鳥ですので、初秋には渡り鳥によって日本国内へ侵入したのではないかと推測されています。約1か月後の10月28日には岡山県倉敷市の採卵鶏農場と北海道厚真町の肉用鶏農場において1, 2例目のHPAI家きん事例が発生しました。この早い時期での発生確認は、日本国内の鳥インフルエンザウイルス濃度が高まっているのではないかとのも考えも専門家の中ではあるようです。最終的には4月7日の北海道千歳市での発生までに26道県84事例が発生し、全国半分以上の都道府県で防疫対応が行われ、約1,771万羽が殺処分の対象となりました。そのうち、採卵鶏は61事例、肉用鶏は12事例の発生があり理由は分かりませんが採卵鶏農場で多く発生したことが昨シーズンの特徴でした。また採卵鶏の飼養羽数では10万羽以上が42事例、50万羽以上が10事例あり、大規模な養鶏場でも発生がみられました。家きん・野鳥・飼養鳥で確認された道県を表すと図(次頁参照)のようになり全国のどこでもHPAIの発生リスクがあると考えられます。この道県を月毎に発生件数を表したものが表(次頁参照)になります。発生は北から南、そして南から北へと移行するものと思われておりましたが、昨シーズンはいつどこで発生するかわからない状態であったことが読み取れるかと思えます。また昨シーズンは沖縄県での発生も話題になりました。寒冷地域での発生が多いと思われる方もいるかもしれませんが、ここで周辺諸外国の様子を見てみましょう。農林水産省のHPで公開されている情報では、昨シーズン、韓国、台湾、ベトナム、フィリピンなどでも家きんのHPAI発生が確認されています。沖縄県より南に位置する台湾であったとしても73件の発生があったことから、温暖地域だからといって油断せず十分注意しなければならないことが分かります。

次に発生農場の疫学調査結果をみてみましょう。そもそも疫学調査結果とは農林水産省職員及び有識者等で構成される疫学調査チームが、HPAI発生農場に訪問し状況調査を行ったもので、農林水産省のHPには発生例毎に調査報告書があげられています。また全ての発生例のまとめも載っています。報告書に記載される内容は、「1.農場の周辺環境・農場概要」「2.通報までの経緯」「3.管理人及び従業員」「4.農場の飼養衛生管理」「5.野鳥・野生動物対策」が記載されています。報告書のまとめをみるとほとんどの農場の通報した理由は「死亡羽数の増加」でした。飼養衛生管理基準にも記載されていますが、毎日の健康観察は大切で、斃死羽数は記録として残しましょう。記録として残っていれば、季節や気候による農場の変化や農場で取り組んでいる事柄への効果判定を客観的に捉えられることにも繋がります。報告書のまとめには「至近のため池等の水場からの距離」という項目もあります。HPAIの発生したほとんどの農場で1km圏内に水場があると報告されていました。圏内の水場が、私もよく入れるゴルフ場の池だったりすると防疫時期だけ水を抜くということは難しいと思います。しかし、農場の近くに池があって鳥インフルエンザウイ



昨シーズンにHPAIが発生した道県

	10月	11月	12月	1月	2月	3月	4月	合計
北海道	1	1				1	2	5
青森		1	1			1		3
岩手						1		1
宮城		1		1				2
山形			1					1
福島		1	1					2
茨城		1	1	1	3			6
群馬			1	3				4
埼玉			1	1	1			3
千葉		1		4	1			6
新潟		1		2		2		5
愛知			2					2
滋賀				2				2
兵庫		1						1
和歌山		2						2
鳥取			1					1
岡山	1	2	1					4
広島			4	2				6
香川		3	1					4
福岡			2	1		1		4
佐賀			1					1
長崎			1					1
大分				1				1
宮崎		1	1	1				3
鹿児島		3	9		1			13
沖縄			1					1
合計	2	19	30	19	6	6	2	84

昨シーズンに発生した
HPAIの道県別・月別の件数

ルス侵入の危険性があるということを知るだけでも大切なことだと思います。2023年7月24日に行われた「昨シーズンにおける高病原性鳥インフルエンザの発生に係る疫学調査報告書」ではフィルターや細霧装置などを取り付けて入気口の対策をすることも検討してくださいとあります。野鳥の糞等に由来する粉じん(ほこり)や羽毛が入気口から取り込まれる可能性も否定できないようです。野鳥や野生動物の侵入防止対策に加えて、入気口の対策も検討してみたいはいかがでしょうか。

最後になりますが、今シーズンも昨シーズン同様に鳥インフルエンザウイルスが野鳥を介して日本国内に持ち込まれる可能性は低いと思います。日本国内全ての養鶏場が同じ鶏舎構造をしていたり、同じような場所にあつたりする訳ではなく千差万別です。改めて各農場のHPAI発生リスク要因を考え、農場毎に適切な対策を取ることが重要になってくるかと思えます。また昨シーズンは早期発見・早期通報・適切な防疫措置によって早期封じ込めができたと報告されています。今シーズンも通常時より死亡羽数が増えた場合には最寄りの家畜保健衛生所へ早期に通報しましょう。2023年のナバックレター養鶏版は今号で最後となります。本年もご覧いただきありがとうございました。

【参考】

環境省HP https://www.env.go.jp/nature/dobutsu/bird_flu/

農林水産省HP鳥インフルエンザ情報 <https://www.maff.go.jp/j/syouan/douei/tori/index.html>